

## 1 ジャズ・エイジ以降

「崩壊」(一九三六)。「一九二〇年代の華やかな「ジャズ・エイジ」も昔日となった日々、アメリカの小説家F・スコット・フィッツジェラルド(一八九六―一九四〇)はこう書いた。「もちろん、あらゆる人生は崩壊する過程である」(一)。自分の外から突然襲って来た大きな出来事があった。そして、おそらく自分の内からわが身を知らぬ間に侵していった出来事もあった。その結果、「まれにみる楽観主義の若者はあらゆる価値の崩壊を経験した」。もはや、「人生が再び快樂にあふれることは決してないだろう」。

しかし、「それがどうした？」フィッツジェラルドは問い続け

る。人生にまつわる物事を「知覚する力のある大人」ならば、「不幸」であることに何の不思議があるというのか。むしろ「幸福」のほうが、「ジャズ・エイジ」のように不自然ではなかったのか。この「不幸」など、「にわか景気の終わりとともに、この国を押し流した絶望の波のようなものだ」。それに「過去の幸福」と言っても、ひたすら「恍惚」を追い求めていたにすぎない。自分は幸福を、「もともと親しい人とも共有することさえできなかった」。一体、こうした「ジャズ・エイジ」とは何だったのか。

「ジャズ・エイジの残響」(一九三三)のなか、フィッツジェラルドは追憶する。「ジャズ・エイジ」は快樂に最上の価値を置く時代だった。「史上最も贅沢な狂騒」。誰もがわれ先に快樂を追い求める競争の人生だった(二)。「ジャズ」という言葉は

「最初はセックス、次にダンス、そして音楽」を意味した。いずれにせよ、「神経刺激の状態」が問題だった。このフィッツジェラルドの観察は、新しい感覚刺激・興奮を受容することに追われる現代の生活状況を批判した、ジョン・デューイの「経験としての芸術」(一九三四)にも通じる(三)。そして、さらにフィッツジェラルドは「ジャズ・エイジの残響」のなか

(…中略…)ジャズ・エイジの特徴はまさに、政治にまったく関心がないことだった」と、フィッツジェラルドは「残響」のなかで振り返っている。

か、「ジャズ・エイジ」を戦争に結びつけていく。彼によればアメリカの「ジャズ・エイジ」は、「戦線の背後の大都市の神経刺激」に発しているという。第一次世界大戦の戦場にならなかつたアメリカでは、金銭だけでなく、「あらゆる神経エネルギー」が「戦争で消費されずに蓄積されていた」のではないか。

「戦争で消費されずに蓄積されていた」「ジャズ・エイジ」の「神経エネルギー」とは、まさに「戦線の背後の大都市の神経刺激」に翻弄されつつ、それを追求して止まなかつた彼自身の肖像だろう。「完全な男」になるという「古い夢」は、「プリンストン大学」年生のときに「一日だけフットボール競技場で身につけたシルダー・パッド」や、「二度も外地で冠ることのなかつた軍帽」と一緒に「ガラクターの山」に捨ててきたと、「崩壊」には綴られている。

こうした「ジャズ・エイジ」の狂騒では、自分の「神経刺激の状態」を、より大きな快樂に向けることが重要だった。「戦争で消費されずに蓄積されていた」「神経エネルギー」は、他人と共有する環境ではなく、快樂をもたらす自分の「神経刺激の状態」に向けられた。だから、「一九一九年の諸々の出来事は革命ではなく、冷笑を私たちに残した」。

それどころか、あらゆる価値の崩壊を経験した今、「親切であること、公正であること、あるいは寛大であること」、